

第2回山形県総合教育会議議事録

- 1 場 所 山形県庁舎 1001 会議室
- 2 日 時 平成 27 年 9 月 29 日 (火)
- 3 出席者
知 事 吉村 美栄子
山形県教育委員会
委員長 長南 博昭
委 員 菊川 明
委 員 小嶋 彌左衛門
委 員 涌井 朋子
委 員 武田 靖子
委 員 (教育長) 菅野 滋
- 4 協議事項
確かな学力の育成について
- 5 議事の経過

司会：教育庁総務課副主幹

開 会

それではただ今から、第2回山形県総合教育会議を開会いたします。
開会にあたりまして、吉村知事より御挨拶をいただきます。

吉村知事

皆様、本日は大変お忙しい中、御出席いただきまして誠にありがとうございます。

さて、5月18日に開催いたしました第1回山形県総合教育会議では、教育等の振興に関する大綱や、教育の面から見た地方創生の方策などについて御協議をいただきました。

委員の皆様と活発な意見交換をさせていただきまして、教育施策の方向性を改めて共有することができたものと思っております。

山形版地方創生総合戦略につきましては、民間や有識者の方々の御意見を伺いながら、このほど「やまがた創生総合戦略(案)」としてとりまとめまして、10月2日までパブリックコメントを実施しているところです。

この戦略(案)の中でも、山形県の未来を支える人材の育成のため、「世界で通用する高い専門性や知識を有した人材の育成」や、「文化等を通して地域への愛着・誇りを醸成」するなど、教育施策が重要なポイントのひとつとなっているところです。引き続き教育委員会の皆様と力を合わせて本県の教育行政を推進してまいりたいと考えているところです。

先月には「平成27年度全国学力・学習状況調査」結果が発表されたところ

ろであります。私としては非常に残念な結果だと感じております。教育に関わる者は危機感を持ってこの結果を受け止めていただきたいと思いますと思っています。

本日は、人材育成の正に根幹となる「確かな学力の育成」ということをテーマに、今後の取組みに関して、委員の皆様と忌憚のない意見交換をさせていただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

協 議

早速、協議に入ります。

本日の会議は14時50分までを予定しておりますので、御協力をよろしくお願いいたします。

それでは、ここからの座長は、吉村知事にお願いしたいと思います。知事、よろしくお願いいたします。

吉村知事

では、暫時座長を務めさせていただきますので、御協力よろしくお願いいたします。

それでは、資料について事務局から説明してください。

教育庁総務課長

それでは、資料の御説明を申し上げます。

初めに資料1をご覧ください。

「1. 学力調査結果の経年変化」をご覧ください。

平成27年度の全国学力・学習状況調査の結果を見ますと、小・中併せて全10科目中5科目が全国平均を下回る結果でした。小・中学校の理科と中学校の国語は、全国平均を上回りましたが、経年変化を示すグラフにも表れていますように、これまで本県の課題とされてきた「算数・数学」と「知識や技能等を活用する力」、B問題の正答率の低さについては、残念ながら改善が見られませんでした。

次に、左下の「2. 学力調査結果の活用と公表の状況」をご覧ください。

自校の分析結果の「教育活動改善への活用」と「保護者・地域の方への公表・説明」についてですが、「公表・説明」については、全国平均を上回り良好な状況でした。一方、「結果の活用」については課題がみられ、意識を高める必要があるといえます。

続いて、右上の「3. 学習状況調査の結果」をご覧ください。

全国と比べて、家庭学習を2時間以上している児童生徒が少なく、テレビを見る時間の長い児童生徒が多い傾向があり、家庭での時間の使い方について、見直しを進めていく必要が感じられます。

自尊感情・思いやり・規範意識等の項目は、全国平均よりも高く、良好な状況にあります。特に、自分が住んでいる地域行事への参加状況を示す

「地域とのつながり」については、小・中とも全国平均を大きく上回っているという状況です。

右下の「4. 結果分析を受けての今後の対策」ですが、県教育委員会としましては、危機感をもって学力向上とそのための授業改善に取り組んでいく必要があると考えております。そこで、「学力向上プロジェクト会議」を設置して外部有識者から意見を頂戴し、今後の学力向上に向けた取組みに反映させるほか、各市町村、各学校にアクションプランの作成・公表を求めていくなど、(1) から (5) に記載しました取組みを柱に、県教育委員会、市町村教育委員会、学校が一丸となって「確かな学力」の育成に努めてまいりたいと考えております。

続きまして、資料2をご覧ください。

中央の「学力の評価・検証」につきましては、小・中・高を通した「探究型学習」の推進と評価検証、英語力の向上のための取組みなどを進めながら、確かな学力の育成に取り組んでいくという内容です。

それを支える環境整備ということで、4つの視点で整理しております。左上には「教員の資質能力の向上」を掲げております。探究型学習を推進できる教員の育成、そのための研修体系の見直し、リーダー層の研修機会の充実が必要と考えております。

左下は「チーム学校の構築」です。教員が授業等に専念できるよう、スクール・ソーシャルワーカー等のサポート人材の配置の充実、また、ICT活用による学びの環境の整備が重要と考えております。

右上は「家庭・地域との連携」です。地域住民等が学校運営に参画するコミュニティスクールの導入促進などについて記載しております。

右下は「地方創生と郷土愛育成」です。若者の県内定着に向けた児童生徒の意識醸成を図るため、キャリア教育の充実や教育・文化による交流の推進などが重要であると考えております。

資料の説明は以上です。よろしくお願いいたします。

吉村知事

ただ今事務局から説明がありました。御質問があれば、後ほど、御発言の中でお願いいたします。

それでは、確かな学力の育成について、協議していきたいと思います。

学力向上に向けた教育委員会の取組みや課題などについてもあわせて御発言いただければと思っております。

はじめに、小学生のお子さんがいらっしゃる涌井委員から、御発言をお願いします。

涌井委員

私からは、小学生の子どももいるということで、家庭教育の重要性についてお話をさせていただきたいと思います。

まず、全国学力テストにおける本県の状況ですが、算数、数学が特に伸

びない、またはできないという要因のひとつとして、問題を解く絶対数の不足があげられるのではないかと考えています。算数や数学の基本となる計算力というのは、どれだけ多くの問題を解いたか、一問でも多くの問題を解くことで身に付くものではないかと思えます。子ども達の取組みが不足しているということは、根本的に家庭での学習時間が足りないからではないでしょうか。

また、家庭学習といえばまず宿題が思い浮かびますが、宿題の内容についても改善すべき点があるのではないかと考えています。ある一定の時間数学習するというだけでなく、取り組む内容、文章問題や子ども達に深く考えさせる問題など、内容についても思い切って考え直す必要があるのではないのでしょうか。

家庭学習を充実させるには、なんと言っても家庭の協力なくしては取り組めません。それには親や、特に祖父母の意識を向上させなくてはならないのではないかと思えます。

学力を高めるということは、子どもの幸せな未来につながるということ信じ、家庭学習に取り組ませるのは保護者の義務であるというくらいの強い気持ちを持って、子どもにも学校にもその思いが繋がっていくように、家庭で、親そして祖父母が取り組んでいかなることが大事なのではないのでしょうか。そして学校と家庭で問題を共有し、お互いに働きかけながらプラスの連鎖で解決していかななくてはならないと思えます。しかし一方で、現代の家庭力にはそこまで望めない、限界があるのではないかと思う部分もあります。そこで期待したいのは、県の構想にあります「地域未来塾」です。これを市民協働で是非とも成功させていただきたいと期待しております。

また、県独自の学力テストを今年度試行するということですが、探究型学習を進めるうえで非常に期待が持てると感じています。現代やこれからの社会が求める人材を育てるためには是非とも身に付けなければならない力というのは、例えばベルトコンベアに乗せられたものを機械的に処理するような能力ではありません。物事を多面的・複合的に見て判断する力、優先順位をつけて物事に取り組むことができる力、問題意識を常に持って今あることやものを改善し続けることのできる力、先を読んで新しいものを創造していくことのできる力、そういった人間にしか持つことのできない力を社会は求めていると思えます。人口減少が加速する中で、地方の経済が持続していくため、日本が再び世界で輝くことのできる時代にしていくには、今の子ども達への教育をしっかりとしていくことが鍵ではないかと思えます。県独自の学力テストが有効に活用されれば、山形の子ども達は、生きる力を育て将来の社会で存分にその力を発揮してくれるのではないのでしょうか。それにはテスト前の取組みだけでなく、その後の検証も徹底してやっていただき、先生方の指導に役立つ、子ども達に学ぶことの面白さを伝えられるようなシステムを是非とも作り上げていってほしいと

考えております。

吉村知事

大変ありがとうございます。

未来に向けてしっかりと、今が大事だということだと思っております。私も、社会の基盤は人間だと思っております。

それでは次に、武田委員御発言をお願いします。

武田委員

私からは、確かな学力の育成を支える教育環境の整備ということで、先生方の職場環境について発言させていただきます。

先生方の多忙化対策というのは、以前からかなり問題となっておりますが、なかなか抜本的な解決には至っていないと感じております。

民間でもそうですが、ワーク・ライフ・バランスの推進、働き方の改革、長時間労働の削減というのが、そもそも何故必要なのか。これからの日本の厳しい社会環境、経済環境に鑑みると必須であるということ、先生方も今の世、これからの世を生きる一個人として是非考えてもらいたいと思っています。教員だから特別とか当てはまらないということはありません。

残念ながら、山形県は女性教員の管理職比率が全国的にも低いという話があります。これは、男女ともにキャリアアップをどれくらい望むかということで、教員の皆様の資質の向上にもつながって、目標としてキャリアアップを望むという方向を男女問わず持っていたきたいと感じております。

この夏、女性校長会で、女性活躍推進の背景や意義について話をさせていただきました。そこで出た話ですが、やればやるほど、できる人に校務がまわってくるといった負担感というのも話題にはなりましたが、意外だったのは、男女の性別役割分担意識というか固定観念が、男性の先生側にもありますが、女性の先生方にもある。特に、先生方は夫婦で教員をしているケースがありまして、一家庭人として考えたときに、旦那様の方のキャリアを優先させて自分はそれを支える側だという意識があるという話が皆様から出ました。

あとは、身近にロールモデルがないという話も複数からあがりまして、ほとんどの校長先生が、まさか自分が校長になるとは思っていなかったと言っています。ではどうして管理職の試験を受ける気になったかという、上司である校長先生、教頭先生からの薦め、励ましが動機付けになったと言っていました。

自分の仕事や生活を、どうバランスをとりモチベーションを維持し続けるか、こういったことを考えるきっかけとしてそのとき話をさせていただいたのですが、女性校長の皆様からは、これからの考え方ということで、男性の管理職の先生方にも話をして欲しいという言葉いただきました。

多忙化改善に一丸となって取り組むこと、男女問わず、指導力向上など、自分のキャリアアップを目指す環境を整えることが重要なことなのではな

いかと思っています。

吉村知事

大変ありがとうございました。

ワーク・ライフ・バランスということで、男性も女性も幸せになる社会を目指すということだと思います。

先生方に焦点を当てての御意見を頂戴しました。

それでは、小嶋委員お願いします。

小嶋委員

児童生徒の学習意欲向上について触れさせていただきたいと思います。

一番思うことは、子ども達にやる気を起こさせることが必要だろうと思います。そのためには成功体験を持たせる、あるいは達成感を持てるようにしてやる環境づくりが大事なのではないかなと思います。

ひとつの例として、宮城県に萩の月というお菓子を作っている会社があります。そこの創業者の方の講演を聞いた時の話ですが、その方は、お菓子屋を始める前に北海道で学校の先生をしていたそうです。戦前なので旧制小学校から旧制中学校への受験の話になるのですが、非常に小さい町の小学校で、その子ども達に試験をやって、満点を取れるまで何度も同じ問題を解かせるという繰り返しをしたそうです。満点を取れるわけですから、その分野については高得点を獲得できる自信が出てきますし、当時の旧制中学、札幌のナンバースクールのなところにもかなり大勢、その過疎地の町から入っていったということで、繰り返しの学習をさせることによって、子どもに自信と達成感を持たせることが可能だという話をなさっていました。

そういう形で成功例を学習すること、成功パターンを紹介していくと言いますか、それぞれの学校の先生方に「こういう例があって、こういう形で成功していますよ。」と紹介していく仕組みと、子ども達に成功体験をさせて自信を持たせるということが必要なのではないかと思います。その辺のノウハウについては色々あると思いますが、ひとつの例として紹介させていただきます。

吉村知事

大変ありがとうございました。

成功体験ということでございました。やる気を起こさせる。

菊川委員お願いします。

菊川委員

資料1を見ても分かりますように、27年度の中学校3年生の学力テストの結果、数学AもBもマイナスなんですけど、この子ども達が小学校6年生のとき、おそらく平成24年くらいを見てみると、やはり特に算数Bが大変悪い。マイナス2.9ということで、小学校6年生のときに悪いところは、やはり継続して中学3年生になっても悪いという結果が統計上出ているようです。

数学を例にあげて話しますが、数学の学力向上のためには、小学校から

の積み重ねが絶対大事だということが言えると思うのです。

では学力向上のためにどのような方法論があるかということ、色々あるとは思いますが、一番手っ取り早い方法として考えられるのは、特にB問題の正答率を上げることを考えるなら、授業で解き方を教える必要があると思うのです。過去の学力テストの問題をテーマに皆で考える授業をやる、要するに傾向と対策ですね。ひとつの問題を分からせるまで、全部解けるまで繰り返しやるということ、更には、制限時間を設けてやってもらう。教えるのもなかなか大変なのでしょうが、やればできるという達成感を感じながら子ども達に学習してもらおうというのが、ひとつの方法論ではないかなと思います。

これからは、大学入試改革も踏まえて、いわゆる暗記型から、総合的に考えるという学習に変えていかなければならないと思われまます。私が体験した司法試験では、例えば憲法の問題ですと、昔は「憲法第9条の戦争放棄について述べよ。」、こういう論述式の問題がよく出ました。これは総論、各論ちゃんと答えを用意しておいて暗記していれば時間内に書けるのですが、最近の試験では、そのような問題は出ません。長文の事例が出て、その中から憲法上問題になる項目を抽出して、そして論じていく形式の問題が出ます。そのためには、暗記ではなくて総合的に日ごろ考えるという癖、学習をしておかないと対応できない。そういう傾向なので、今、教育庁で探究型学習、例えば国語と社会の問題を併合して出すとか、算数と理科の問題を併合してその中から出すとか、教科の枠を越えた問題も考えていくと。こういうような学習がこれからたぶん必要になってくるのではないかなと思います。

それを実現させるために大切なのは教師の役割です。今の先生がそういうことに対応していけるためには、先生の多忙化をなんとか軽減しないとイケない。私は教師をやった経験がないのでどうしたらいいか分からないのですが、それをなんとか考えていただきたいと思います。

吉村知事

大変ありがとうございました。

それでは、長南委員長お願いします。

長南委員長

先ほど事務局から説明がありました資料の、全国学力テストの中学校3学年の経過を見ると、7年8年前の結果と今年度の結果は大きく違ってきますよね。何故こんなことになったのか不思議に思います。

今、各委員から色々な考えや思いを話していただきましたが、そういったことができる制度が山形にはあるわけです、「教育山形さんさんプラン」という。この「さんさんプラン」も今危ない時期に来ています。学力との関係で、果たして効果があるのかどうか。

「学力の経済学」という本が出ています。中室牧子さんという方が書いているのですが、その本の項目のひとつで少人数学級編制を取り上げてい

る。その結論は何かというと、「あまり効果がないでしょう」というまとめなんです。でも私は、これはちょっと違うのではないかなと思います。学者によってまとめ方が色々あるわけで、国立教育政策研究所の研究報告によると、一番望ましい形が「さんさんプラン」だという研究報告もあるんです。

ですので、今ここで「教育山形さんさんプラン」をどうこうするのではなくて、この制度は山形県の宝ですから、この制度を生かして、あとは学校の先生方の頑張りですね。もちろん保護者、家庭の努力も必要です。

「教育山形さんさんプラン」というのは制度であって、各学校でやっている少人数指導とかチームティーチング指導というのは指導論です。制度と指導論を同時の形で進めています。私が少人数学級編制を導入しようとして文部科学省と戦ったときには、少人数指導との戦いで少人数学級編制をとったわけですから、両方やるというやり方は教育的な方法としてはいかなものかなと思います。ですので、これからは「教育山形さんさんプラン」の学級編制を一本に絞って、そこで共に学ぶ子ども達がお互いに苦労しながら、知恵を出し合いながら、時間はかかるけれども、最後に「分かった。」「できた。」という達成感が必要かなと思います。

今、学校はどうかすると学習者側、子ども達の側だけを考えて方法論を議論しますが、それが教員の多忙化につながっていくのではないかなと思います。だから、ここをできるのは校長先生の力です。校長が決断しないと学校の運営はなかなか難しい。それ以上に、教育行政もあまり口を出さないようにするべきではないのかなと思います。

これが3回目の提案ですが、「教育山形さんさんプラン」は是非残すべき重要な山形県の宝だと思います。

吉村知事

ありがとうございました。

皆様から一通り御発言を頂戴したところですので、私からも一言申し上げたいと思います。

資料1を見ますと、右肩下がりという言葉がそのまま当てはまるグラフになっておりますので、私も大変がっかりですが、県民の皆さんも大変不安に思っているのではないかと思います。

特に経済界の方々から、「今すぐに影響は出ないと思うが10年後20年後の山形県がどうなっていくのか心配だ。」とか、「こういった学力の子ども達が社会を担うときに、どうなっていくのか心配だ。」という言葉は何人からも頂戴しました。

私も同感でして、学力が全てではないということも確かではありますが、学力も、教育にとっては非常に大事なものだろうと思っております。学校、学び舎というのはやはり学ぶところですので、しっかりと、少なくとも全国の平均以上は取っていただければなと思っております。

長南委員長から話のあった「さんさんプラン」というものも、日常生活

面だけでなく、学力も両方効果が上がるようにということを考えて実行した経緯があったと思っています。もう一度検証といいますか、山形の宝ではあるんですが、どうやったら学力向上に結びつけていけるかということ、今真剣に考えないと、この傾向が続くようであれば本当に大変なことになると思っています。

山形の未来を支える人材育成ということで、しっかりと今後とも学力向上に力を入れていただきたいと思っています。

今後、学力向上のための取組みとしまして、有識者会議を開くことにしていますが、外部からの新しい視点そして考え方というものを十分に踏まえながら取り組んでいただきたいと思っています。皆さんも県民の代表ということで御意見を頂戴しているのですが、更に有識者会議、有識者の皆さん方からも新しい考え、視点というものを頂戴していくことになっているようです。

教員の役割は本当に重要です。今後10年間の教員の大量退職ということが出てきますので、次世代のリーダー育成は喫緊の課題です。特に女性の割合が多いのが教員の世界でして、女性の活躍もとても大事なことだと思っています。女性が活躍できる職場環境づくりについてもしっかりと取り組んでいただきたいと思っています。

やまがた創生のためにも、人材育成が大きな柱ですので、今後とも教育委員の皆様と力を合わせて取り組んでいきたいと思っておりますので、よろしくお願ひしたいと思っています。

引き続き、教育長、発言してください。

菅野教育長

皆さんから色々お話しいただきましたが、私達として、数字を色々な形で分析して、しっかりと見つめ直すということが、今回の結果を見ても必要かなと思っています。

そのためにも、市町村、学校ごとにしっかりと分析して、まず自己評価をしっかりとやらないと、次のステップというのはないかなと思っています。今回の対策の中にも、アクションプランの作成ということ掲げているので、しっかりと取り組んでもらいたいと思っています。

ただ作っていただくだけではなくて、我々としてもそれを見させていただいて一緒に考えていくという取組みで、双方向にやり取りをしながらやっていくというのが大切なのではないかと考えます。

吉村知事

小学校、中学校は市町村の管轄だと思いますが、市町村教育委員会の危機感というのはどのくらいあるものでしょうか。

菅野教育長

確かに市町村によってばらつきがあるのは間違いないと思いますが、今回の結果については、県全体としての数字を御覧いただいて、かなり危機感を持っていただいているかなと思っております。先ほど申し上げたアク

シヨンプランを作っていたいただいている最中なので、それを見た上で、具体的なことは私どもから申し上げていきたいと思っております。

吉村知事

県教育委員会の役割もあると思いますが、市町村教育委員会と意識を共有していくというのがとても大事だと思っています。危機感を一緒に持たないと、色々な取組みが切実なものになっていかないのではないかと私は心配しております。これだけ右肩下がりになってきたということをもっともっと一緒に、顔を合わせて、本当に議論討論しなければならないのではないかと私は思うのですが。

菅野教育長

当然教育庁レベルでもそうですし、指導主事等が回る際にも学校現場を回ってそれぞれ指導することになりますので、そういった機会については、これまで以上に多くもっていきようにしていきたいと思えます。

吉村知事

よろしくお願ひしたいと思えます。

行政的な視点ばかり入ってしまいましたが、委員の皆様から御発言があればお願ひします。できれば学力向上に関することをお願ひしたいと思えます。

先ほど委員長から、学力の経済学というようなお話を頂戴しましたが、少人数学級にしてもあまり効果はないのではないかとというような内容だったのですか。

長南委員長

中室さんという方の本は費用対効果ということを重視しているんですね。費用対効果でみると確かにそういうことが言える可能性がありますが、実際にそうなのかと言えば、私は、そうではなくて、中室さんは学校の様子をよく分からない方ではないのかなと思えます。

今この問題を解決するには、先ほど色々な方法論が出ましたが、校長の意識改革が必要かなと思えます。校長がやる気になって取り組まないと、なかなか効果に結びつかない。また、学校の中にも、校長の意思が即ち全職員に通じるかどうかという問題があるような気がします。

今、山形県の教員の年代別を見ると50歳代が大半ですから、もう10年も経つと大量に交代になるわけですね。そここのところもひとつの鍵かなと思えます。

ですので、校長の意識改革、これが大事かなと思えます。

「さんさんプラン」を導入するとき、既に1年目2年目の段階で、きっと中だるみが出るだろうということが指摘されていたんですね。意識の低下が起こってくると。確かにそうです。十何年も経って、当時の意識がどうも分からない方から「さんさんプラン」は当たり前なことだと思われてしまうと大変なことですね。ですからもう一度、事務局の頑張りが必要だと思います。事務局が頑張って、校長をどういうふうに刺激するかということがポイントを握っているのではないかなと思えます。

吉村知事

ありがとうございました。
校長先生の意識改革というところが出てまいりました。
ほかに皆様からありませんでしょうか。
はい、涌井委員。

涌井委員

長南委員長から校長先生の意識改革というお話がありましたが、私事なのですが、うちの子どもが通っている小学校で月に一回行われる定期テストでは、これまで、落ちこぼれがないように皆が80点ないしは100点を目標にして取り組むようなテストを出していただいていたんですが、今年からテストの内容がガラッと変わりました、毎月のテストが、合格するのを目標にしないとちょっと大変だよというような中身のテストになりました。

更に年に3回、活用テストという名前で、チャレンジ問題的な複合的な問題を出すようなテストを実施することになりました。今のところまだ一回目の活用テストが行われた段階ですが、非常に難しいテストだったようです。特に算数は、うちの子の学年は100人近い子ども達がいるのですが、合格点である80点以上を一人しか取れなかったということでした。

私の子どもも散々な成績でショックを受けて帰ってきたのですが、そのあとで先生の解説を聞いて、分かったわけなんです。その分かったことがものすごく嬉しくて、帰ってくるなり目をキラキラさせて「分かったよ。」と私に報告してくれた。それが達成感ということなのかなと思います。

更に、子ども達からは「もっと難しい問題にチャレンジしてみたい。」という意欲的な要望も出ているようで、まだ一回しか行われていないテストですが、子ども達にとってはすごくいい体験になったようです。

それが多分、今までもう何十年も続けてきた定期テストのあり方を、今年度から校長先生が思い切って決断されて変えられたということだったと思います。これからどのように子ども達に変化が訪れ、そして学力向上につながるかはまだこれからの課題かと思うのですが、私個人としては、難問に挑戦する、いつも解いているものより少し難しい問題に挑戦するということは、解けたときの喜びと達成感を味わうのはもちろんなんですが、上の問題を解いたことによって、間違っただとしても、それより簡単な問題に対する意識が、「これは簡単だから解けるはずだ。」というように、子どもにとっても、基礎的・基本的な問題に対する意識が変わってくるのではないかと思います。そうしますと、難問に挑戦させるということもまた、基礎や基本を大切にすることを養うのに通じてくるのではないのかなと考えます。

難問というと、先生方が準備するのは大変だと思いますが、スパイス問題シートという県教育委員会で準備してくれている問題集もあって、うちの学校でも、そのシートを使ったと思われるような宿題がよく出てくるよ

うになりました。それを活用していただいて、子ども達に、分かる喜びと学ぶ意欲に結びつくような取り組みをさせてもらえたらと思います。

そういうことをすることによって、子ども達自身が、「学びたい。」「分かりたい。」「できるようにになりたい。」と思えるようになることが一番大事なのではないかなと考えました。

吉村知事

ありがとうございました。

本当に、一人ひとりが達成感を持って取り組むようになったら変わるだろうなと思いました。

この右肩下がりの表を見ていると、下がっている、何とかしなければというのは、大体誰でも思うこととして、ただ、うちの町、うちの村、うちの学校がどうなっているのかということが分からなければ、取り組みようがないというか、緊迫感といいますか、そこが出てこないかなと思うんですね。

私は内容的なことをお聞きしたので言えるのですが、前回はあまり良くなかったある自治体が、頑張って取り組んだが故にぐっと上がってトップクラスにいつている例もあるんですね。小さな自治体ですが、そういった頑張り、それこそまちの活性化になるのではないかとあって、上位3位5位辺りを公表したらいいのではないかとやったところなのですが、そういったことも柔軟に考えていただければなと思ったところなんです。皆がそうやって頑張っていけば、それが相乗効果といいますか、皆が平均以上を目指すということになっていくのではないかと。35市町村全部を出せということではないんですね。そうすると一番下の方まで出てしまいますので、そこは色々なメリットデメリットがあるかと思っております。

そのようなことを、私としては教育長に言ったところです。

吉村知事

ほかに何か御発言ございましたら。

はい、小嶋委員。

小嶋委員

知事がおっしゃったことと同じような考え方になると思いますが、私も成績上位の方を公表した方がいいのではないかと思います。

今、学校は、競争させないような方向で評価を進めているようですが、競争意識というのが、向上に非常に大きな役割を担っていると思っておりますので、ある程度の競争がなければ向上というのは見込めないのではないかと思います。チャレンジして困難に立ち向かうガッツを持っているような子どもを育てる必要があるのではないかと日ごろ思っています。

そのガッツを育てるにはどのようにするかというのは、色々方法論があると思いますが、とにかくある程度上を向いて頑張ろうというような子どもを育て、自治体がそういう形で頑張るといのは大事だと思います。

ひとつ例を申し上げますと、私は造り酒屋をやっているんですが、毎年

5月に全国新酒鑑評会というのがあります。大体5月20日の10時に独立行政法人酒類総合研究所のホームページに発表になるのですが、発表の瞬間を会社中が静まって見ている。大学受験の発表を見るようなことを毎年やっているんです。

これは技術の向上を図るためにやっているのですが、今年の例で言うと852点出て金賞合格するのが222点です。26.05%の合格率、毎年4分の3が落ちるんですね。その4分の1に何とか入ろうとして毎年皆頑張っているわけですが、それをやることによって酒造技術が上がるという結果をもたらしています。そういうことで、子ども達にも競争させるべきではないかと思っています。

吉村知事

ありがとうございました。

はい、武田委員。

武田委員

先ほどから知事が「危機感」とおっしゃっていますが、どれくらい真剣にとらえているかとなったら、学力調査結果の活用という部分でも100%近く見直して、徹底的に、次はどういう取組みをするかという振り返りをやらなければいけないと思います。

企業でもそうですが、行きたい目標よりももっとも高い目標を掲げて、それに辿り着くにはどうしたらいいかというプロセスを皆で一緒になって考えて、あとは気持ちや意識という部分で、校長先生がどのようにして日々理念を共有するか、意識のベクトルを学力向上という方向にもっていかかということに真剣に取り組んでいただきたい。そして、そういうことができた良い事例を皆さんで共有して、関心を持っていただきたいなと感じています。

去年6月のOECDの調査で話題になりましたが、日本の先生方の勤務時間が世界最長であると、授業以外の部活動や校務などでとにかく多忙だという話がありました。一方で、指導力に対する自己評価が極めて低い、世界平均で85%の方が「生徒に勉強できると自信を持たせる」という項目でイエスと答えているのですが、日本では17.6%の方しか自信があると答えていないという数字でした。

これはじっくり生徒や自分の指導力に向き合う時間がないからではないかと思っています。そのための対策として、校務の効率化のためのICTの活用や外部からの部活指導者登用や地域ボランティアの活用など、本腰で積極的に取り組んでいただく必要があると思っています。

また、父兄の理解も必要だと思っています。私の娘の部活動では、部活動の管理運営事務を先生一人でやられていまして、手配から銀行の通帳管理まで雑務が非常に多い。そういった実態を知って、親もきちんと責任と役割分担ということで協力しなければいけないのではないかと考えております。

先生方自身の意識改革も鍵ではないかと思います。何でもかんでも忙しいのは当たり前と諦めムードになっているのではないかと思います。世界的に学力が高いフィンランドの国で有名な話があるのですが、職員室に必ずソファとコーヒーマシンがあるそうです。それはひとつ心のゆとりを表すものではないかなと思っておりませんが、心のゆとりがあるから生徒一人ひとりとの対話に重点を置くことができるという話でした。対話を重視すると個性を認めるゆとりもあって、それが子ども達の自己肯定感にもつながっていくと考えております。

質問ではなくて、どういうふう感じたのかということと一緒に考えて、考えることを大事にすることで、生徒自身の学びたいという意欲や姿勢を育てるとすることも大事なのではないかと思います。

探究型学習というのは、考え方というかプロセス自体が大事な授業だと思っておりますが、先生方自身も、生徒を見て力を引き出す授業として、これまでにない視点も大事になってくるのかなと思います。

一巡目の話に戻りますが、ワーク・ライフ・ソーシャルバランスという考え方も大事になってくるのかなと思います。総合的な学習につながる社会的なものの見方、考え方というのは、机上だけではなくて経験から得られるものも多くあります。「先生は意外と社会のことを知ってるようで知らない。」謙遜して言っているのではないかとは思いますが、たまにそういう話を聞きます。やはり時間に余裕がないと世間にも目がいかなくなるのかなと思います。確かな学習につながる先生方の望ましい在り方や環境改善に、是非確実に多方面で取り組んでいただければと思っております。

吉村知事

はい、大変ありがとうございました。

皆様方から熱心に御議論いただいたと思っております。

様々な視点から貴重な御意見を頂戴いたしました。本当にありがとうございました。

確かな学力の育成というのは、教育行政の基本中の基本だと思います。県民の願いでもあると考えているところです。

教育関係者が一丸となって学力向上に取り組んでいただきたいと思いますので、どうぞよろしく願いいたします。

以上で協議が終了いたしましたので、ここで座長を降りさせていただきます。円滑な進行に御協力いただき、大変ありがとうございました。

閉 会

それでは、以上を持ちまして第2回山形県総合教育会議を終了いたします。

皆様ありがとうございました。